

第24回 東京弁護士会人権賞 受賞

特定非営利活動法人 山友会



特定非営利活動法人 山友会

1984年、無料診療所を中心として設立。2002年4月、NPO法人格を取得。日雇い労働者の町と言われる山谷地区で、路上生活者が人間らしく生きていけるために、医療、食料、衣服、生活相談など様々な支援をしている。

左から
ルボ・ジャン代表
石塚時雄事務局長

山友会は、1984年の創設以来、東京都台東区の子谷地区で、無料診療所、炊き出し、衣服等の援助、生活相談など、多岐にわたって路上生活者等の支援を行ってきた。「格差社会」、「貧困問題」などが時流を表すキーワードとして語られる昨今、その取組みをあらためて評価することの意義は大きいと思われる。また、総合的な支援をするNPO法人から見て、弁護士が法的支援の要請に応えられているのかも気になるところである。

（聞き手・構成：伊藤 敬史）

——この度は、人権賞の受賞、おめでとうございます。

石塚：この度の受賞は、社会福祉活動をしている者にとっては、最高に栄誉なことであり、ありがたいと思います。人権賞受賞のことをクリスマスカードに書いて、いつも寄付してくれている後援者の方々に報告したら、弁護士会から表彰されるほど素晴らしい団体なのかということで、例年にない多くの寄付を頂きました。我々にとっても栄誉なことですが、我々を支援してくれている人にとっても栄誉なことなんですね。

——そういう話を聞くと、私たちもうれしいです。山友会の活動はとても幅広いようですが、主にどのような活動をされているのか、ご紹介いただけますか。

石塚：山谷地区で路上生活をしている人、生活に困っている人に役立つことは何でもやろうというのが私たちの考えです。

第1が無料のクリニック、第2が炊き出し、第3が衣服の配布、第4が生活相談、その他にも散髪などの細かいこともやっています。

山友会クリニックでは、正規の医師が無料で診察しています。山谷地区の方は、健康保険に入っていないだったり、本名を明かしたくない事情を持っていたりするので、本名を明かさずに無料で診療を受けられる診療所が必要でした。開設時には、適任の医師が何人か現れたり、自分のところで使わなくなった医療設備を使わないかと申し出があったりして、発足に至りました。これは奇跡のようでした。

ジャン：もともと無料の診療所から始まりましたが、薬よりも食料を与えた方がいいではないかという医師の意見もあり、炊き出しを始めました。こちらが何か物を持って相手の生活をしている場に行くことで、皆さんがどういう生活をしているのかを聞いても、心を開いてもらえるようになりました。

——最初はクリニックに人を受け入れるところから始まり、次第に山友会から人々の生活の場に出て行ってサポートをするようになったということですか。

ジャン：そうですね。人々がどういう環境の中で生活しているのか。それがわかったら、アドバイスの仕方が変わると思います。

石塚：キャンプ生活をしている人たちが、自分の仕事のないときには、私どもの活動を手伝ってくれています。そういう人たちが山友会に集まっており、ジャンさんが冗談を言うので、みんなの笑い声が絶えません。路上生活の人たちは、普通は1週間誰とも話さないということも珍しくないんですが、この山友会のある横丁に来ると、みんなが活き活きと笑っています。それが、何よりも大切なことだと思います。

——まさに、そこで生活をしている人たちの人生が笑顔で飾られるものならいいですね。生活相談というのは、どういうことをされているんですか。

ジャン：借金が多いですね。あと住民票を作りたいという相談。病気や精神障害の相談。生活保護の相談。生活保護の申請でも、1人では役所に行けない人が多いです。偽名を使っている人が多いので、書類を作ったり、仕事を紹介したりするのも簡単にはいきません。

石塚：1番目に、生活保護の問題。生活保護が必要な人でも、今までに施設を飛び出してきてしまって、福祉事務所に不義理のある人など、簡単ではありません。そういう人たちの相談にのり、こういうふうに申請をしましょうという相談をします。

2番目に、年金の問題。話を聞くと、年金をもらえるのに、もらっていない人がいます。

3番目に、借金の問題。借金を抱えて、逃げてきた人がたくさんいます。

——1984年に、この活動を立ち上げようと考えたのは、どうしてなのでしょう。

石塚：元々、アルコール依存症の回復のための施設として山谷マックという団体がありましたが、もっと総合的な医療が必要だということで山友会が始まりました。

ジャン：山友会は、神父さんと精神科医が始めました。私は、オープンしてから2、3ヶ月してから入りました。

——ジャンさんは、元々、カトリックの宣教師でいらしたということですが、どうして山友会の活動に関わるようになったのでしょうか。

ジャン：私は、カナダから宣教師として来日して、日本語を学ぶ一環として中古車販売会社に勤務していましたが、その会社が潰れてしまいました。ちょうどその頃、山友会でボランティアをやらないかと誘われて、参加しました。1984年当時、山友会は、ネズミだらけの古い木造の建物を借りて、クリニックや炊き出しをやっていましたが、施設に限界がありました。何とか自前のビルを持って、活動を充実させたいと思い、深く関わるようになりました。

——25年以上活動されてきて、どんなことにやりがいを感じますか。

ジャン：山谷の人たちは、飲んべえとか、仕事をしないとか、とても差別されています。でも、彼らは、例えば、騙されやすい人で、財産を失ってしまったりしていますが、悪い人ではありません。人間として、完璧ではないけれども、人生をやり直したいと思っています。その人たちが、山友会がきっかけでお互いに親しくなり、活動の手伝いをしてくれるようになります。ひとり者どうしても、みんな大切な家族のようになってきます。家に来たり、カラオケに行ったり、一緒に泣いて、笑って、生活を共にしています。山友会から出て行った人も、何か困ったことがあると山友会に戻ってきます。山友会を通じて、いつの間にか、その人のことを心配する人が出てきます。

それでやり直したいと思うのです。それがとても大事だと思います。

石塚：ジャンさんが一番うれしそうな顔をしているのは、山谷のおじさんたちと一緒にわいわいがやがやと話をしているときです。

ジャン：彼らから毎日のように「話をできるのはジャンしかない」と、電話がかかってきます。山友会の活動時間だけでなく、24時間生活を共にしているから、そういう関係を築けるのだと思います。

——逆に、運営をしていて、苦勞されている点はありませんか。

ジャン：こういう世界なので、必ず亡くなる人が出てきます。みんながずっと一緒にいられたらいいんですが。後は、運営資金のことですね。

——話は変わりますが、東京都の統計によると、路上生活者の数は減っていることになっています。例えば、2005年は4763人だったのが、2009年は2451人と半分近くになっています。そのような実感はありますか。

ジャン：それは注意が必要です。確かに、3千円アパート（ホームレス地域生活移行支援事業）を導入した結果、隅田川沿い等のテントは2007年までに80%以上減りました。しかし、その後、派遣切りの影響などで、2009年3月頃から、新たな路上生活者が増えてきています。問題は、人数が増えただけでなく、かつてテントを張っていたところが閉鎖されて、昔のようにテントを張れなくなったということです。路上生活者の人数は増えているのに、居場所がなくなっています。

——実際には、去年くらいから路上生活者は増えているということですか。

ジャン：例えば、炊き出しをやっているけど、2007年は300人くらいでしたが、最近では550人以上が並んでいます。企業の派遣切りは、関西で多かったのですが、

東京にその人たちが流れて影響が出たのは少し遅れてからのことです。

——格差社会ということが言われていますが、それを実感しますか。

ジャン：そうですね。隅田川の桜橋や言問橋には、週に2、3回、ヘリコプターが飛びます。なぜかという、その橋から川に飛び込んで自殺するからです。自殺するのは、最近、路上生活者になった人がほとんどです。

——そういう人が自殺をする前に、山友会に相談に行けるといいですね。

ジャン：そうですね。

——先ほど借金の問題等の話がありましたが、弁護士に対するアクセスはどうでしょうか。

ジャン：山友会では、借金の問題などで、弁護士に電話をつなぐことはあります。それはありがたいです。

石塚：弁護士や司法書士につなぐケースは、結構ありますね。

——山友会からご覧になって、弁護士の法的支援に期待したいことはありますか。

ジャン：借金の問題など、ケースワーカーの力では解決できない点について、法律の専門家に期待しています。

——最後に、今後の活動の抱負をお聞かせください。

ジャン：若い人に道を作ってあげたいです。また、山友会は、1人1人を大切にするために、今以上に大きくはしたくないです。

石塚：けっして規模の拡大は狙わないということです。山友会は、あくまでも、どこからも支援の手の届かない人々に対する活動を地道に続けていきたいです。